花街を構成する建築物に関する分布の変遷

－昭和初期から現在における新潟市中央区古町の三業を対象として－

TRANSITION OF DISTRIBUTION ON BUILDINGS IN “KAGAI”

－ A case of Furu-machi in Niigata City from early Showa period to the present －

久保有朋*, 岡崎篤行**, 松井大輔***

Aritomo KUBO, Atsuyuki OKAZAKI and Daisuke MATSUI

Kagai is a Japanese term for traditional entertainment districts. It collectively inherit many aspect of traditional Japanese culture. Furu-machi is a significant Kagai, because the historic townscape, which is different from those in Kyoto or Kanazawa, is remained. This study aims to clarify transition of distribution on buildings in Kagai at the period of 1930, 1958, 1972 and 2013. As one of conclusions, we found that the streetscape was completely different from the one we can see today. Although Ryoriya are major landmarks in Furu-machi at present, Machiai and Okiya used to dominate this area in the early period.

Keywords : *Kagai, Townscape, City Formation, Three Type Businesses, Niigata, Furumachi*

花街, 景観, 都市形成, 三業, 新潟, 古町

1 研究の背景と目的

舞踊や純邦楽、和食、着物、数寄屋造り等の日本文化をハード・ソフトともに包括的に継承する花街^{注1)}(かがい^{注2)})は近年、その文化的、建築的価値が再評価されつつある。京都では、花街の景観や文化の保全・継承活動により花街が町のシンボルとなり、インバウンド観光の増加に大きく貢献している。こうした効果は、現役の花街をもつ他都市でも同様に期待でき、さらには花街が消滅した都市でも活性化の手法として有効と考えられる。かつて花街は全国の都市に存在したと言われるが¹⁾、現在では一定規模^{注3)}の現役の花街は約40カ所に減少した。この内、茶屋中心の花街である京都と金沢では重要伝統的建造物群保存地区選定に先立ち、街並みの調査がなされ、その歴史的価値が明らかとなっている。しかし、これらを除く東京や新潟等の多くの花街は料理屋^{注4)}中心であり、街並み調査がなされた場所はほとんどない。新潟市の中心市街地に位置する古町^{注5)}花街は、花柳界^{注6)}が現役であると同時に、戦災被害が軽微であり、大火や地震の被害も限定的だった^{注7)}ことから、戦前の歴史的建造物が数多く残っている²⁾。加えて、規模や格式で全国随一の料理屋「鍋茶屋」「行形亭」がある。これらより、古町花街は料理屋中心の大規模な伝統的花街として全国的に見て特に貴重な花街と言える³⁾。現在、古町芸妓の育成支援^{注8)}に加え、石畳舗装等のハード整備や建築物の修理修景に係る協定の導入^{注9)}が進行し、景観や花柳界文化を活かしたまちづくりが行われている。一方、現在の景観は昭和の古町花街の全盛期と比較して大幅に変化している。今後の更なる景観の変化や花柳界関係者の高齢化により、歴史を読み解く手掛かりの消失が危惧される現状を鑑みると、全盛期の古町花街の姿を明らかにすることは喫緊の課題といえる。

そこで本研究では古町花街の全盛期といえる昭和初期及び中期の代表的な年代を選定し、各年代での花街建築^{注10)}の業種毎の分布とその変遷、設定年代間の用途転換の傾向を明らかにする。これにより古町花街の全盛期における花街建築の分布的特徴、及び全盛期から現在までの分布的・業種的变化を可視化することを目的とする。こうした史的研究を行うことは、町の文化的価値の明確化に繋がるため、今後古町花街を文化遺産と捉え、地区指定等の制度を適用する際に、本稿は地区の歴史や性質を記す上での基本的な情報として必要だと考えられる。

2 研究の位置付け

古町花街は料理屋中心の大規模な花街として全国的に貴重だが、全国の花街の内11箇所を類型化し、概要をまとめた書籍¹⁾に記述が無い。また、これまで古町花街の歴史的景観の特徴に着目した研究⁴⁾や文化・歴史的側面に着目した研究⁵⁾はあるが、本研究のように昭和初期から現在にかけて敷地単位で、花街建築の分布の変遷に着目した研究はない。対象地の異なる類似研究として、東京の神楽坂⁶⁾及び八王子⁷⁾、京都の上七軒⁸⁾、山形⁹⁾の花街を対象としたものはあるが、戦前の町並みが残る料理屋中心の花街を対象とした研究はない。

3 古町花街の概要

3-1 諸元(表1, 図1)

新潟市は人口約80万人、土地面積は726km²の政令指定都市である。古町地区は明暦元(1655)年に町立てされた旧新潟町のほぼ中央に位置し、戦後に開発された新潟駅周辺の万代地区と共に新潟市の商業の中心地である²⁾。旧新潟町は南北に延びる「通り」、東西に延

* 新潟大学大学院自然科学研究科 博士前期課程

** 新潟大学工学部建設学科 教授・博士(工学)

*** 新潟大学工学部建設学科 助教・博士(工学)

Grad. Stud., Dept. of Science and Technology Niigata University

Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata University, Dr.Eng.

Assist. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata University, Dr.Eng.

びる「小路」という2種の街路により構成される両側町¹⁰⁾だが、堀が町を分断していたため、堀の両側では片側町となっていた¹¹⁾。古町花街の中核部は、中央区の古町通八・九番町、西堀前通八・九番町及び東堀通八・九番町に位置し、地区面積は約5.7ha、用途地域は商業地域となっている。古町通・西堀前通・東堀通の八番町は新堀通と坂内小路の間、九番町は坂内小路と広小路の間の区画である。現在、13軒の料理屋と1軒の待合、2軒のホテル内の料理屋が新潟三業協同組合¹²⁾に加盟しており、この内3軒の料理屋と2軒のホテル内の料理屋は中核部の地区外にある¹³⁾(図1)。また、古町花街の中核部はバーやキャバクラ等が集積する歓楽街でもある。ここには通りと通りの間に平行に走る、背割り線上に作られた「新道」と呼ばれる細い街路、通りと新道を繋ぐ敷地間の境界線上に作られた「路地」がある。古町花街の路地の多くは特殊な所有形態であり、「ヘヤナカサ」と呼ばれている¹¹⁾。古町花街はこれら4種の街路で町並みが構成されている²⁾。なお、新道は古町通の東西に一本ずつ存在し、現在も多くの料理屋がこの道に面している。加えて、料理屋「鍋茶屋」が面する八番町側の東新道は「鍋茶屋通り」と呼ばれている。現在、古町花街には国の登録有形文化財である料理屋として、地区内に「鍋茶屋」、地区外に「行形亭」の2軒がある。また、新潟を本拠とする「日本舞踊市山流」は新潟市無形文化財の第一号に指定されている。

3-2 歴史(図1, 図2)

古町花街の起源は江戸時代中期に現古町通三・四番町を核として存在した数軒の遊女屋群「中道」と言われる。宝暦(1751～1763年)以降は現古町通五・六番町に花街(分離前)が延長し、その発展と共に中道は廃れていったとされる¹²⁾。明治3(1870)年の「越後新潟全図」には現古町通八・九番町の位置に「妓楼多シ」と記載があり、既に現在の位置に花街(分離前)があったことが分かる。その後、明治期の大火を機に遊郭統合計画が進められ、古町地区の東西の新道に「芸妓の花街」、郊外に「娼妓の遊郭」が形成された。昭和5(1930)年には新潟三業協同組合が結成され、昭和30年代には好景気で芸妓数が約200名まで増加するが、その後40年代から減少し、50年代には芸妓数は2桁となった¹²⁾。芸妓数の減少を受け、昭和62(1987)年には全国初の置屋株式会社「柳都振興株式会社」¹⁴⁾が設立され、芸妓に対して福利厚生が行き届いた現代的雇用形態が実現した。また、昭和62年の第一回開催からほぼ毎年開催されている古町芸妓総出演の舞踊公演「ふるま新新潟をどり」¹⁵⁾は、平成27年で27回目を数える。さらに、近年は古町花街のなじりね協定区域や新潟市民文化遺産¹⁶⁾への認定、東新道の石畳化等が行われ、花街の町並み保全が進められている。

4 調査・分析方法

4-1 4時点の設定

戦前、戦後、現在の比較時点を設定する。戦前に関しては、藤村³⁾が昭和5年頃の三業組員名簿を基に、住民や古町芸妓へのヒアリングを行い作成したとされる、昭和5年頃の古町花街の地図がある。これが現在入手できる戦前の古町花街の建築物に関する用途と分布を示す唯一の地図資料であり、昭和5年頃は戦前の芸妓数のピークでもあったため、この時期を第1時点とする。次に戦後に芸妓数がピークを迎え、売春防止法が施行された昭和33年頃を第2時点とし、芸妓数が減少してきた昭和47年頃を第3時点とする。さらに、現在として主たる調査を実施した平成25年頃を第4時点とする。

4-2 建築物用途の分類(図3)

三業建築と花街関連建築を合わせて花街建築とする。三業建築は料理屋、待合、置屋¹⁷⁾を指し、これらは新潟三業協同組合に加盟している。花街関連建築としては、日本舞踊や小唄等の稽古施設、小間物店、呉服店、髪結屋、邦楽器店等が挙げられる。ただし、ヒアリングで花柳界関係者の利用が判明した店舗を中心に取り上げることとする¹⁸⁾。一般建築は住居、店舗、その他、不明に分類し、店舗は一般飲食店¹⁹⁾、風俗営業店、物販・事務・サービス業店、宿泊施設、遊戯施設に細かく分類する。風俗営業店は店名にスナック・クラブと付くものを地図上で抽出し、それらの店舗が風俗営業等の規制及び業務の適正化等に関する法律(通称風営法)に準じているか、新潟県社交飲食業組合へのヒアリングで確認する。雑居ビルは、1棟の建築物内に2軒以上が入居するものとする²⁰⁾。

表1 古町花街の諸元表

地区名	古町(ふるまち)
所在地	新潟県新潟市中央区古町通8・9番町、東堀通8・9番町、西堀前通8・9番町
地区面積	約5.7ha(本稿の図4～図7の範囲)
用途・防火地域	商業地域、準防火地域
景観の地区指定	新潟市景観計画区域 なじりね協定区域「中央区古町花街地区」
花柳界組織	①新潟三業協同組合 ②新潟市料理業組合 (行形亭、かき正、金辰、大善、大丸、鍋茶屋、やひこ、小三、有明、寿々むら) ③みどり会料理業組合(一ツ喜楽) ④新潟市古町料理店組合(美や古)
①…②～⑤の上部組織 ②…料理屋の組合 ④…待合の組合 ⑤…置屋の組合	⑤新潟芸妓置屋組合 (柳都振興株式会社、稲申登、藤桜、初柏、幾村、米鹿島、小村家、月本、一元、ふじ本、分木、曾久本、恵美中、小木本、春中、津乃)
まちづくり組織	古町花街の会 新潟まち遺産の会
支援組織	柳都振興後援会 古町芸妓育成支援協議会
芸妓数	27人(うち柳都さん12人)
三業建築数	料理屋:13軒(内地区内9軒)、待合:1軒(休業中)、置屋:16軒(内地区内2軒)
流派(舞踊)	市山流、藤間流

図1 古町花街の中核部位置変遷図及び現在の中核部外の料理屋²¹⁾

図2 古町花街の歴史・芸妓数の変遷

4-3 調査方法（表 2）

調査に使用した資料を表 2 に記す。昭和 5 年頃については資料 18 の古町花街地図を用いる。この地図と現存する歴史的建造物の敷地形状を比較すると、形状は異なるが敷地規模は概ね同じであるため、これを基に地図を作成する。さらに資料 1・2・3・4 に記載のある料理屋・待合・置屋の住所と資料 18 の地図を照合し、花街建築の分布の正確性を補完する。資料 5 は昭和 5 年頃から 33 年頃の変化の要因を探るために用いる。昭和 33 年頃については資料 6 を用いる。この地図の敷地形状にも現状と異なる箇所があるため、敷地割を正確に分析するにあたり、資料 6 より敷地形状が現状に近い資料 7・9・12 を補足的に使用し、地図を作成する。この地図を基に資料 8・10・11 を用いて昭和 33 年頃の花街建築の分布を特定する。昭和 47 年頃については資料 17 を用いる。この地図では長屋内の各所有者で仕切り線を記していないため、建物境界の判断が可能である。また、建物境界が曖昧だが、店名や家主名の記載がより詳細な資料 16 も補助的に使用し、地図を作成する。この地図を基に資料 13・14・15 を用いて昭和 47 年頃の花街建築の分布を特定する。平成 25 年頃については資料 21 及び白地図を用いつつ、現地踏査^{注 22)}により敷地形状を正確に把握し、地図を作製する。この地図を基に資料 19・20 を用いて平成 25 年頃の花街建築の分布を特定する。

さらに、本調査では昭和 30 年頃から現在まで芸妓として活動する 3 名の古町芸妓にヒアリングし、芸妓置屋名簿と地図に記された芸妓の本名の照合を行い、置屋の位置を特定した。これは住宅地図の置屋の表記が芸妓の本名のみであり、屋号が記されていない場合が多く、置屋と一般住居の表記の区別が困難だったためである。加えて、作成した 4 時点の地図の精度を上げるため、一定期間三業会館^{注 23)}にこの地図を掲示し、複数の古町芸妓及び料理屋関係者の協力の下、確認作業を行った。なお、作成した地図の敷地番号は、敷地割が地図上からある程度正確に読み取れる昭和 33 年頃の敷地割を基準とし、以後敷地の分筆がなされた場合「○ -1, ○ -2」と表す。

4-4 分析方法

各時点における分布とその変遷を明確化するため、街区を A～H の 8 つのエリアに分類する。エリア A については広小路・西堀通・坂内小路・西新道に囲われた区画とし、他のエリアも同様に設定する。また、前面道路別の花街建築の分布も合わせて分析する^{注 24)}。なお、この分析は文献及び現地調査等に基づき、多くの花街建築の玄関が新道や路地側に設けられていることを前提としている^{注 25)}。また、置屋と花街関連建築では、一棟の建築物に複数入居している場合が多々あるため、棟数と合わせその軒数も括弧内に記す^{注 26)}。

5 三業を中心とした建築物の分布（表 3）

5-1 昭和 5 年頃の用途（表 3, 表 4, 図 4）

全建築物 342 棟中、料理屋は 17 棟、待合は 27 棟（28 軒）、置屋は 98 棟（114 軒）、花街関連建築は 26 棟（27 軒）あり、全体の約 49％を花街建築が占めていた。分布をエリア別で見ると、料理屋は H 地区に多い。待合は A 地区に特に多く、地区内全域にも広く分布していた。置屋は E 地区に特に多く、待合同様、地区内全域にも広く分布していた。花街関連建築は C、F 地区に特に多く、H 地区以外では分布が確認できた。次に分布を前面道路別で見ると、料理屋は八番町側の東新道沿いに最も多かった。待合も八番町側の東新道沿いに特に多かったが、料理屋の分布と違い、東西新道沿いに満遍なく分布していた。

置屋は西新道沿いに特に多かったが、他の新道や路地沿いにも満遍なく分布し、わずかに古町通及び坂内小路沿いにもあった。また、置屋の分布に戸建か長屋かの違いによる特徴は見られなかった。加えて、置屋名に「分」や「新」が付くものは他の置屋からの分家であることが古町芸妓へのヒアリングで分かった^{注 27)}。花街関連建築は古町通沿いに集中的に分布し、東新道及び九番町側の路地沿いには邦楽

図 3 本研究における建築用途の分類^{注 28)}

表 2 調査使用資料

資料番号	種類	史料名	出版年	出版	内容(◎:地図記載○:住所表記、△:名称表記×:無)			
					料理屋	待合	置屋	花街関連建築
1	書籍	船江の華	昭和4年	東北時報社	○	○	×	×
2	名簿	新潟三業組合員名簿	昭和7年	新潟三業組合	△	△	△	×
3	名簿	芸妓連名表	昭和9年	新潟三業組合	×	×	○	×
4	書籍	舟江の華	昭和10年	東北時報社	○	○	×	×
5	名簿	新潟市三業組合員名簿	昭和18年	新潟市三業組合	○	○	○	×
6	住宅地図	新潟市家屋明細図	昭和33年	都地形測量社	◎	◎	×	◎
7	住宅地図	新潟市家屋明細図	昭和35年	株式会社東京交通事業社	◎	◎	×	◎
8	書籍	新潟花街	昭和35年	新潟市観光協会	◎	×	○	◎
9	住宅地図	新潟市町内別居住者地図帳	昭和36年	富士波出版	◎	◎	×	◎
10	名簿	新潟市町内別居住者名簿	昭和36年	富士波出版	○	○	○	×
11	書籍	新潟花街	昭和37年	新潟市観光協会	◎	×	○	×
12	住宅地図	新潟市街明細図	昭和39年	株式会社東京交通事業社	◎	◎	×	○
13	名簿	芸妓連名表	昭和44年	新潟芸妓置屋組合	×	×	○	×
14	名簿	三業組合電話番号表	昭和44年	新潟三業協同組合	○	○	○	×
15	書籍	ふるまち	昭和45年	新潟三業協同組合	○	○	○	×
16	住宅地図	日興の住宅地図西部版	昭和45年	日興出版社	◎	◎	×	◎
17	住宅地図	日興の住宅地図西部版	昭和47年	日興出版社	◎	◎	×	◎
18	書籍	新潟の花街 古町芸妓物語	平成23年	新潟日報事業社	◎	◎	◎	◎
19	名簿	三業協同組合名簿	平成25年	新潟三業協同組合	○	○	○	×
20	名簿	新潟芸妓置屋組合名簿	平成25年	新潟芸妓置屋組合	×	×	○	×
21	住宅地図	ゼンリン住宅地図 新潟県新潟市	平成25年	株式会社ゼンリン	◎	×	×	◎

表 3 エリア別・花街建築に関する分布の変遷

用途	年代	A	B	C	D	E	F	G	H	計
料理屋	昭和5年	1	3	3	2	0	3	1	4	17
	昭和33年	1	1	4	4	6	3	1	7	27
	昭和47年	1	1	4	5	6	3	1	6	27
	平成25年	1	1	2	4	2	0	0	2	12
待合	昭和5年	7	1	4	1	4	3(4)	4	4	27(28)
	昭和33年	4	3	3	1	2	2	5	1	21
	昭和47年	4	3	3	1	1	1	4	1	18
	平成25年	0	1	1	0	0	0	0	0	2
置屋	昭和5年	13(14)	16(21)	15(18)	11(12)	22(24)	6(7)	10(12)	5(6)	98(114)
	昭和33年	9(10)	9(14)	7(7)	9(9)	5(5)	3(3)	7(7)	3(3)	52(58)
	昭和47年	11(13)	8(13)	8(9)	7(9)	3(3)	3(3)	6(6)	2(2)	48(58)
	平成25年	0	1(1)	0	0	0	0	1(1)	0	2(2)
花街関連建築	昭和5年	1	4	7	1(2)	2	7	4	0	26(27)
	昭和33年	2	1(2)	3(4)	0(2)	0	2	3(4)	1(2)	12(18)
	昭和47年	1	1	3(4)	0(2)	0	3	3(4)	1	12(16)
	平成25年	1	0	2	0	0	0	1	0	4
花街建築	昭和5年	22(23)	24(29)	29(32)	15(17)	28(30)	18(20)	19(21)	13(14)	168(186)
	昭和33年	16(17)	14(20)	17(18)	14(16)	13	10	16(17)	12(13)	112(124)
	昭和47年	17(19)	13(18)	18(20)	13(17)	10	10	14(15)	10	105(119)
	平成25年	2	3	5	4	2	0	2	2	20

※表の数値は棟数、()内の数値は軒数を示す。

写真 1 昭和 30 年代前半の西堀前 写真 2 昭和 31 年の古町通八番町¹³⁾(奥の建物は小三本館) 町¹⁴⁾(手前右の建物は大竹座)

図4 昭和5年頃の花街建築の用途分布 (注29)・注30)

図5 昭和33年頃の花街建築の用途分布 (注32)

師匠宅が集中していた。花街関連建築は、日本舞踊教授所、長唄師匠宅、清元師匠宅、鳴物師匠宅、呉服店、半襟屋、履物店、足袋屋、小間物店、髪結屋、人力屋、邦楽器店、銭湯^{注31)}が確認でき、芸妓の生活に密着した店が多かった。また、古町花街には昼間の歓楽街的要素である大勝座、新潟劇場、大竹座等の劇場もあった。

5-2 昭和33年頃の用途(表3、表4、図5、写真1、写真2)

全建築物284棟中、料理屋は27棟、待合は21棟、置屋は52棟(58軒)、花街関連建築は12棟(18軒)分布し、全体の約39%を花街建築が占めており、昭和5年頃と異なり料理屋数が待合数を上回った。分布をエリア別で見ると、料理屋はE、H地区に特に多い。昭和5年頃と比べ全エリアで料理屋数は増加しており、特にD、E地区はその傾向が顕著である。待合はA、G地区に特に多く、昭和5年頃と比べ待合数は全エリアで緩やかに減少したが、G地区のみわずかに増加した。置屋はB地区に特に多いが、昭和5年頃と比べ分布の偏りは小さくなった。また、置屋数は全エリアで減少し、E地区は特にその傾向が顕著である。花街関連建築は分布の偏りがほとんどなく、棟数は全体的に緩やかに減少し、C、F地区では激減した。次に分布を前面道路別で見ると、料理屋は八番町側の東新道沿いだけでなく、八番町側の西新道及び九番町側の東新道沿いにも多くなった。待合は昭和5年頃と同様、八番町側の東新道沿いに特に多く、東西新道沿いに満遍なく分布している。置屋は九番町側の路地沿いに特に多く、ここは昭和5年頃からの減少がないが、東西新道及び八番町側の路地沿いでは減少し、特に西新道沿いの減少は著しい。また、長屋型の置屋は九番町側の路地沿いに

のみ分布が確認できた。花街関連建築の分布傾向は昭和5年頃と同様であり、三業組合、芸妓置屋組合、小唄師匠宅、笛師匠宅が新たに確認できた。古町芸妓によると、芸妓置屋組合の建物には出入りしたが、三業組合の建物には出入りしていないとのことだった。これより、この時点では三業組合と芸妓置屋組合の事務所が異なる場所にあったことが分かった。劇場では大勝座が廃業し、新潟劇場が宝塚劇場に変わった。

5-3 昭和47年頃の用途(表3、表4、図6)

全建築物278棟中、料理屋は27棟、待合は18棟、置屋は48棟(58軒)

表4 前面道路別・花街建築に関する分布の変遷

街路種類	通り										小路				新道				路地			
	西堀前通		古町通		東堀通		東堀通		坂内小路		新堀通		西新道		東新道		西側		東側			
料理屋	町内	8番	9番	8番	9番	8番	9番	—	8番	9番	—	8番	9番	8番	9番	8番	9番	8番	9番	8番	9番	
	昭和5年	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	3	5	2	1	1	0	0	2	
	昭和33年	1	0	0	2	0	1	0	0	0	0	1	6	1	7	5	1	1	0	0	0	
	昭和47年	0	0	0	2	0	1	0	0	0	1	1	6	6	5	1	1	1	0	0	0	
	平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	1	5	1	2	4	0	1	0	0	0	
待合	昭和5年	1	0	0	0	0	0	0	1	0	0	4(5)	5	8	5	0	3	0	0	0	0	
	昭和33年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	4	4	6	3	0	2	0	0	1	1	
	昭和47年	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	2	4	4	5	3	0	2	0	1	1	
	昭和47年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	5	3	0	2	0	0	1	1	
	平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2	4	1	0	1	0	0	0	0	
置屋	昭和5年	0	0	3 (4)	2	0	0	0	1 (2)	3	0	17 (19)	18 (22)	11 (13)	14 (15)	10	9	1	10 (13)			
	昭和33年	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4	5	8	8	3	11 (17)	3	9			
	昭和47年	0	1	0	0	0	0	0	0	0	2	7 (8)	7	7	7	4	11 (17)	1	8 (11)			
	平成25年	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	0	0	0	
	昭和5年	2	0	9	9	0	0	0	0	2	0	1	0	1	1 (2)	0	0	0	1			
花街関連建築	昭和33年	0	1	4	3	1	0	0	0	1	0	0	0	1 (3)	0	0	0	0	1 (3)			
	昭和47年	0	1	5	3	1	0	0	0	0	0	0	0	1 (2)	0	0	0	0	1 (2)			
	平成25年	0	1	1	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0	1			
	昭和5年	3	0	12 (13)	12	0	0	0	2 (3)	5	0	23 (26)	26 (30)	25 (27)	22 (24)	11	13	1	13 (16)			
	昭和33年	1	2	4	6	1	1	0	0	1	1	14	10	22 (24)	18	4	14 (20)	4	11 (13)			
花街建築	昭和47年	1	2	5	6	1	1	0	1	1	9	12 (13)	19 (20)	17 (17)	5	20	14 (16)	2	14 (14)			
	平成25年	0	1	1	1	1	0	0	0	1	1	3	2	6	0	1	0	1	0	1	1	

※表の数値は棟数、()内の数値は軒数を示す。

図6 昭和47年頃の花街建築の用途分布

軒)、花街関連建築は12棟(16軒)分布し、全体に占める花街建築の割合は約38%となった。待合と置屋の棟数はわずかに減少したのみであり、各花街建築の分布についても、エリア別・前面道路別どちらにおいても、分布傾向に変化は見られなかった。このことから、昭和33年の売春防止法施行後、待合が激減したわけではないことが分かった。

5-4 平成25年頃の用途(表3, 表4, 図7)

全建築物241棟中、料理屋は12棟^{注33)}、待合は2棟^{注34)}、置屋は2棟(2軒)、花街関連建築は4棟分布^{注36)}、全体に占める花街建築の割合は約8%となった。特に置屋数は昭和47年頃と比較して大幅に減少した。分布をエリア別で見ると、料理屋はE、H地区で激減し、特に多い地区はD地区になった。待合はB、C地区に各1棟、置屋はB、G地区に各1棟、花街関連建築はC地区に2棟、A、G地区に1棟となり、全エリアで激減した。花街建築全体の分布を見ると、C、D地区に特に多く、F地区には花街建築はない。次に分布を前面道路別で見ると、料理屋は九番町側の東新道沿いのみ昭和47年頃と同様多く分布するが、その他の街路沿いでは全体的に減少した。待合は九番町側の西新道及び東新道沿いに各1棟となり、全体的に激減した。置屋は九番町側の西新道及び八番町側の東新道沿いに各1棟となり、待合同様全体的に激減した。花街関連建築は昭和47年頃まで特に多く分布した古町通沿いで激減し、東新道及び九番町側の路地沿いでは邦楽師匠宅が全て廃業した。現役の花街関連建築は、三業会館、邦楽器店、日本舞踊教授所、小間物店である。また、元古町芸妓が営業する元置屋の飲食店「久本」や、新潟三業協同組合脱退後も料理屋を営業している「小

図7 平成25年頃の花街建築の用途分布^{注37)}

黒館」「金富」「一酔」等、花街の名残を感じさせる建築物もある。

5-5 4時点の比較(表3, 表4, 表5, 表6, 図8)

昭和5年頃から平成25年頃の4時点で全建築物に占める花街建築の割合は約49%、約39%、約38%、約8%と推移し、約1/6にまで減少した。各花街建築の棟数は、料理屋は約29%、待合は約93%、置屋は約98%、花街関連建築は約85%減少した。一年毎の棟数の変化率を見ると、増加したのは昭和5年頃から33年頃の料理屋数のみであった。昭和33年頃にある料理屋の内、昭和5年頃から同じ敷地で営業を続けていたものが4棟、他の敷地から移転したものが5棟(内、調査範囲外からの移転が2棟)、麺類業の組合^{注38)}から料理屋業の組合に移ったものが1棟、新規出店のものが17棟であり、新規出店が多いことが分かる。さらに、新規出店17棟のうち6棟は昭和18年の名簿に記載があるため、11棟は戦後から昭和33年頃の高度経済成長期に新規出店したと推測できる。料理屋は板前の雇用や板場の設置等、待合等と比較して費用がかかるため、社会の好景気が料理屋数増加の一因だと考えられる。また、昭和5年頃から33年頃、昭和47年頃か

図8 花街建築における用途毎の割合の変遷

表5 花街建築を中心とした4時点の用途変遷

凡例 ■ 料理屋(料亭) ◆ 待合(茶屋) ● 置屋 ▲ 花街関連建築

第1時点(昭和5年)			第2時点(昭和33年)			第3時点(昭和47年)			第4時点(昭和25年)			
番号	用途		番号	用途		番号	用途		番号	用途		
A	1	●	1	一般飲食	1	住居	1	歩道				
	3	●	3	住居	3	●	3	サービス				
	4	●	4	●	4	●	4	雑居ビル				
	6	●	6	住居	6	●	6	宿泊施設(旅館)	6-1	住居		
	7	不明	7	◆	7	◆	7	雑居ビル	一般飲食			
	8	◆	8	◆	8	◆	8	風俗営業				
	9	サービス	9	▲(三業組合事務所)	9	▲(焼香・歌舞練場)	9	▲(焼香・歌舞練場)				
	10	◆	10	◆	10	◆	10-1	一般飲食				
	11	●	11	●	11	●	11	一般飲食				
	12	不明	12	■	12	■	12	■				
	13	◆	13	◆	13	◆	13	住居				
	14	●	14	●	14	●	14-1	駐車場				
	15	◆	15	住居	15	住居	14-2	雑居ビル				
	16	●	16	住居	16	住居	15	風俗営業				
	18	●	18	●	18	●	18	一般飲食				
	19	◆	19	◆	19	◆	19	風俗営業				
	20	●	20	不明	20	不明	20-1	雑居ビル				
	21	●	21	物販	21	住居	20-2	サービス				
	23	◆	23	◆	23	◆	21	雑居ビル				
	24	空地	24	●	24	●	22	雑居ビル				
	26	▲(半雑屋)	26	▲(見番)	26	不明	23-2	駐車場				
	27	●	27	一般飲食	27	一般飲食	24	駐車場				
	B	1	▲(銭湯)	1	▲(銭湯)	1	▲(銭湯)	1	歩道			
		2	サービス	2	●▲(義太夫師匠)	2	不明	2	駐車場			
		3	道楽施設	3	●	3	不明	3	一般飲食			
		4	●	4	●	4	●	3	一般飲食			
		5	●	5	●	5	●	5-1	一般飲食			
6		■	6	●	6	●	5-2	雑居ビル				
7		●	7	住居	7	住居	6-1	雑居ビル				
8		●	8	倉庫	8	住居	7	駐車場				
11		●	11	住居	11	一般飲食	8	一般飲食				
13		▲(足袋屋)	13	物販	13	物販	11	一般飲食				
14		●	14	住居	14	住居	13	雑居ビル				
15		●	15	住居	15	住居	14	一般飲食				
17		●	17	●	17	●	14	一般飲食				
18		■	18	◆	18	◆	17-1	駐車場				
20		●	20	●	20	●	17-2	住居				
21		▲(髪結い屋)	21	◆	21	◆	18	不明				
22		●	22	●	22	●	20	雑居ビル				
24		▲(足袋屋)	24	住居	24	不明	21	一般飲食				
25		飲食	25	■	25	■	22	一般飲食				
26		●	26	不明	26	物販	24	一般飲食				
27		●	27	住居	27	住居	25	■				
28		◆	28	◆	28	◆	26	物販				
31		■●	31	不明	31	飲食	27	住居				
32		●	32	不明	32	不明	28	雑居ビル				
35		●	35	住宅	35	住居	31	雑居ビル				
C		3	●	3	住居	3	住居	3	空地			
		7	不明	7	不明	7	住居	7	空地			
		8	●	8	●	8	不明	8	雑居ビル			
		10	●	10	◆	10	◆	10	一般飲食			
		11	●	11	住居	11	一般飲食	11	駐車場			
		12	■	12	住居	12	物販	12	雑居ビル			
		13	●	13	不明	13	住居	13	雑居ビル			
		14	◆	14	住居	14	サービス	14	雑居ビル			
	15	◆	15	住居	15	住居	15	雑居ビル				
	16	▲(長唄師匠)	16	住居	16	住居	16	▲(邦楽器店)				
	17	▲(邦楽器店)	17	▲(邦楽器店)	17	▲(邦楽器店)	17	▲(邦楽器店)				
	19	●	19	●	19	●	19	一般飲食				
	20	●	20	●	20	●	20	一般飲食				
	21	●	21	●	21	●	21	一般飲食				
	22	●	22	●	22	●	22	一般飲食				
	23	●	23	●	23	●	23	一般飲食				
	24	●	24	●	24	●	24	一般飲食				
27	●	27	●	27	●	27	一般飲食					
28	●	28	●	28	●	28	一般飲食					
30	●	30	●	30	●	30	一般飲食					
31	●	31	●	31	●	31	一般飲食					
32	●	32	●	32	●	32	一般飲食					
34	●	34	●	34	●	34	一般飲食					
35	●	35	●	35	●	35	一般飲食					
36	不明	36	■	36	■	36	一般飲食					
D	1~3	◆	1	◆	1	◆	1	空地				
	2	●	2	●	2	●	2	住居				
	5	●	5	■	5	■	5	住居				
	7	物販	7	■	7	■	7	住居				
	8	●▲(鳴物師匠)	8	●▲(鳴物師匠)	8	●▲(鳴物師匠)	8	一般飲食				
	9	●	9	不明	9	不明	9	空家				
	11	●	11	●	11	●	11	雑居ビル				
	12	不明	12	住居	12	●	12	一般飲食				
	13	●	13	●	13	●	13	住居				
	17	●	17	●	17	不明	17	不明				
	19	●	19	不明	19	不明	19	一般飲食				
	20	■	20	●	20	●	20	一般飲食				
	25	物販	25	●	25	●	25	一般飲食				
	26	●	26	■	26	■	26	雑居ビル				
	29	道楽施設	29	道楽施設	29	道楽施設	29	駐車場				
	30	●▲(鳴物師匠)	30	●▲(鳴物師匠)	30	●▲(鳴物師匠)	30	雑居ビル				
	31	▲(清元師匠)	31	■	31	■	31	■				
33	不明	33	不明	33	■	33	■					
34	◆	34	◆	34	住居	34	一般飲食					
E	1	◆	1	住居	1-1	◆	1-1	一般飲食				
	2	●	2	住居	1-2	一般飲食	1-2	一般飲食				
	4	●	4	一般飲食	1-3	一般飲食	1-3	一般飲食				
	5	●	5	住居	2	旅館	2	雑居ビル				
	7	●	7	不明	4	一般飲食	4	一般飲食				
	9	●	9	住居	5	物販	5	雑居ビル				
	11	●	11	住居	7	宿泊施設(旅館)	7	雑居ビル				
	12	●	12	住居	9	不明	9-1	一般飲食				
	13	▲(人力屋)	13	住居	9	不明	9-2	雑居ビル				
	14	◆	14	不明	11	不明	11	一般飲食				
	15	◆	15	■	12	住居	12	住居				
	16	◆	16	■	13	一般飲食	13	一般飲食				
	17	一般飲食	17	●	14	一般飲食	14-1	住居				
	18	●	18	旅館	14	一般飲食	14-2	住居				
	19	●	19	旅館	15	■	15	駐車場				
	20	▲(髪結い屋)	20	一般飲食	16	■	16	■				
	21	●	21	●	17	一般飲食	17-1	雑居ビル				
	22	●	22	住居	17-2	一般飲食	17-2	一般飲食				
	23	●	23	住居	18	●	18	旅館				
	24	●	24	●	19	●	19	旅館				
27	●	27	◆	20	●	20	一般飲食					
28	●	28	住居	21	●	21	空家					
30	●	30	不明	22	●	22	飲食					
31	●	31	●	23	●	23	住居					
32	●	32	■	24	●	24	不明					
34	●	34	住居	27	●	27	◆					
35	●	35	住居	28	●	28	不明					
36	不明	36	■	30	●	30	不明					
F	2	◆	2	◆	19	●	19	一般飲食				
	3	■	3	不明	20	■	20	■				
	5	▲(小間物屋)	5	不明	21	サービス	21	一般飲食				
	6	▲(半雑屋)	6	◆	22	◆	22	◆(休業中)				
	7	▲(廢物店)	7	一般飲食	24	▲(日本舞踊家元)	24	▲(日本舞踊家元)				
	8	◆	8	不明	25	◆	25	雑居ビル				
	9	▲(花街関係物販)	9	▲(花街関係物販)	26	不明	26	一般飲食				
	10	▲(小間物店)	10	一般飲食	27	住居	27	宿泊施設				
	11	◆	11	◆	28	●	28	雑居ビル				
	12	道楽施設	12	道楽施設	29	●	29-1	一般飲食				
	13	◆	13	事務所	30	▲(呉服店)	30	一般飲食				
	19	●	19	■	32	不明	32	不明				
	20	■	20	■	33	▲(清元師匠)	33	雑居ビル				
	21	●	21	●	35	不明	35	空家				
	22	住居	22	▲(廢物店)	36	■	36	■				
	26	■	26	一般飲食	37	▲(呉服店)	37	雑居ビル				
	27	●	27	●	38	不明	38	不明				
29	不明	29	●	39	不明	39	不明					
30	▲(足袋屋)	30	一般飲食	40	▲(廢物店)	40	不明					
31	▲(銭湯)	31	一般飲食	40	不明	40	一般飲食					
34	▲(銭湯)	34	▲(銭湯)	40	一般飲食	40	一般飲食					
35	●	35	住居	40								

ら平成 25 年頃にかけての置屋の減少率は大きい。これら以外では全てで一定の減少傾向が読みとれる。これより、置屋を除く花街建築数は昭和 40 年頃から激減し始めた芸妓数（図 2）と異なり昭和 47 年頃までは大きな減少に至らず、その後も現在まで一定の減少を続けたと考えられる。さらに、加藤は典型的な三業地^{注 39)}の分業制度モデルを検番 1 軒、置屋数十軒、待合数十軒、料理屋数軒としている¹⁾が、これは昭和 5 年頃から 47 年頃までの古町花街の花街建築数の割合と合致する。

昭和 5 年頃から 47 年頃は推定だが、4 時点全てに共通する特徴は、三業建築の多くが新道・路地沿いに存在したということである。昭和 5 年頃から 47 年頃までは、路地のみ、又は通り・小路どちらかと路地を前面道路とする花街建築も多く、エリア別では B 地区に、前面道路別では九番町側の路地沿いに多かった。また、そのほとんどは複数の置屋が入居する長屋だったが、平成 25 年頃では全てなくなった。長屋型の置屋が多かった背景には、当時一人置屋が多かったこと、独立したての芸妓は一軒家を借りられず、長屋や店舗の二階を間借りすることが一般的だったこと等の理由があると花柳界関係者が認識していることが古町芸妓へのヒアリングで分かった。

昭和 5 年頃から 33 年頃での花街建築の分布の大きな変化は、エリア別では B、E 地区、前面道路別では西新道沿いの置屋数が激減したことである。この時、西新道沿いにあった置屋の多くは住居に転用された。昭和 5 年頃では料理屋数は待合数の約半数であり、分布も八番町側の東新道沿いに限られていたが、昭和 33 年頃では料理屋数は倍になり、分布も広域化した。この際、料理屋が特に増加した八番町側の西新道沿い及び九番町側の東新道沿いでは、置屋から料理屋への転用が多く見られた。このように置屋と料理屋の棟数と分布は昭和 5 年頃から 33 年頃で大きく変化した。待合と花街関連建築は棟数こそ緩やかに減少したものの、特に変化はなかった。

花街建築の用途の変化を見ると、昭和 5 年頃から 33 年頃では用途が継続される場合が最も多く、次いで住居への転用が多い。当時、営業主が廃業後に自宅として使うようになったことや住宅として貸し出すケースが多かったと花柳界関係者が認識していることがヒアリングで分かった。昭和 33 年頃から 47 年頃でも用途の継続は変わらず最多だったが、住居へ転用するものは少数だった。また、待合と置屋は昭和 5 年頃から 47 年頃までは料理屋への転用が多い。当時、廃業した置屋や待合の建物を料理屋が購入することや、置屋の経営者が本業の収入不足を補うために待合や料理屋を経営することがあったと花柳界関係者が認識していることがヒアリングで分かった。昭和 47 年頃から平成 25 年頃では、待合と置屋では一般飲食店への転用が最多となり、用途の継続が最も多いのは料理屋のみだった。また、料理屋と待合では用途を継続するものの内、店名が変わらず、営業的にも継続するものが大半だった。また、料理屋等が取り壊され雑居ビルに建替えられたもので、元の名称を継承しているものは 11 棟見られ、景観が大きく変化する中にも歴史を垣間見ることができる。

6 結論

(1) 昭和 5 年頃には少なくとも全建造物の約半数が花街建築であり、約 40 年後の 47 年頃では約 4 割だったが、次の約 40 年後の平成 25 年頃には 1 割以下まで激減した。昭和 5 年頃には花街建築の約 6 割が東西の新道沿いに分布し、東西新道沿いの建築物の内、約 7 割が花街

表 6 花街建築の用途転用（上位 3 用途を記載）

用途	順位	昭和5年⇒昭和33年		昭和33年⇒昭和47年		昭和47年⇒平成25年	
		用途	軒数	用途	軒数	用途	軒数
置屋	1	置屋	37[16]	置屋	49[45]	雑居ビル	24
	2	住居	35	料理屋	6	一般飲食	20
	3	料理屋	14	住居	5	住居	8
料理屋	1	料理屋	6[5]	料理屋	24[24]	料理屋	12[12]
	2	住居	5	住居	3	雑居ビル	7
	3	置屋	3	置屋	3	一般飲食	3
待合	1	待合	15[10]	待合	18[17]	一般飲食	6
	2	住居	6	料理屋	3	雑居ビル	5
	3	料理屋	5	住居	2	待合	2[2]
花街関連建築	1	花街関連	12[8]	花街関連	16[14]	雑居ビル	8
	2	住居	6	物・事・サ	3	花街関連	5[4]
	3	飲食	5	住居	2	一般飲食	1

※花街建築で用途を継続したものの内、店名も同じものの軒数は□内に示す。

建築だった。特に東新道沿いは近年まで花街建築が最も多いが、対照的に西新道沿いの花街建築数は昭和 5 年頃から 33 年頃に激減した。

(2) 三業建築の内訳を見ると、昭和初期は待合・置屋ともに料理屋より多いが、現在は料理屋数が待合・置屋数を上回っている。これより、古町も関西を除く全国の花街同様、昭和初期は置屋と待合中心だったことが分かった。一年毎の変化率を見ると、全体的に一定の減少傾向が見られ、増加したのは昭和 5 年頃から 33 年頃の料理屋数のみだった。

(3) 各三業建築の分布を見ると、料理屋と置屋には偏りがあり、待合には偏りがない。置屋は昭和初期には西新道沿いに多いが、昭和 33 年頃には激減した。料理屋は昭和初期には八番町側東新道沿いに多いが、昭和中期では九番町側東新道及び八番町側西新道沿いにも急増した。一方、九番町側西新道沿いには全時点でほとんど見られない。現在、三業建築の多くは新道・路地側に入口を設けている。過去には路地のみに面する三業建築も多く、その大半は置屋だった。

(4) 三業建築相互の用途転換について、料理屋はどの時点でも少ないが、待合と置屋は昭和 47 年頃以降では多い。また、待合と置屋は昭和 47 年頃までは料理屋への転用が多く、昭和 5 年頃から 33 年頃では住居への転用も多かったが、近年は一般飲食店への転用が多い傾向にある。

(5) 今後の研究課題として、昭和 5 年以前の資料の入手及び建築物の分布の解明、昭和 5 年以降の用途転換の要因の究明が挙げられる。また、計画論的課題の一つとして、地区内全域に花街建築が分布していたことから、地区全体での歴史的建造物の修理や一般建造物の修景、電線や屋外広告物の整理等のハード面の整備が望まれる。特に昭和初期から現在まで花街建築が多い東新道は、現在の景観的価値に加え歴史的価値も付加されるため、重点的に整備すべきと考えられる。

謝辞

本研究は平成 24～26 年度科学研究費補助金（基盤研究 B）、公益財団法人大林財団の平成 26 年度研究助成による研究成果の一部である。また、ヒアリング調査及び地図作成に参加した帆刈典子氏、ヒアリング調査に協力して下さった行形和也氏、平野千恵子氏をはじめ料亭関係者の方々、古町芸妓の福豆世様、延子様、扇弥様には大変お世話になりました。ここに記して厚く謝意を表します。

注

注 1) 芸妓を呼べる料亭等のサービス業がある程度集積している都市の一面を指す。花街は元来、芸妓と娼妓が混在していたが、明治頃から分離してきた。本稿では分離以前の花街を「花街（分離前）」と表記する。分離前後の詳細は参考文献 1) を参照。温泉地にも芸妓は存在するが、本稿では除く。

注 2) 昭和になり「はなまち」という読み方が広まったが、起源は「花街柳巷」という漢語であるため、音読みの「かがい」が適切。

注 3) ごく少数の高齢の芸妓のみが存在し、一軒程度の料理屋があり、日常

的に活動しているとはいえない花街は除く。

注 4) 一般には「料亭」という名称がよく使われるが、組合の名称や風営法等の条文では「料理屋」という名称が使われるため、本稿はこれに倣うこととする。「茶屋」でなく「待合」という名称を用いる理由も同様である。

注 5) 「古町」には、「町名」「通り」「地区」「花街」の 4 つの地理的な意味が存在する。

注 6) 花街は場所を指し、花柳界は業界を指す言葉として区別する。

注 7) 戦後の特に大きな災害として、昭和 30 年の新潟大火と昭和 39 年の新潟地震があったが、古町花街は大きな被害を受けなかった。

注 8) 「古町芸妓育成支援補助金」とは、古町芸妓の技能伝承及び育成にかかる経費の一部を新潟市と民間が共同で補助する制度。

注 9) 「新潟市町並み整備なじらね協定」とは、歴史的町並みの残る地域でまちづくりに向けた協定を決め、住宅等の改修にかかる費用の一部を新潟市が助成する制度である。古町花街のなじらね協定認定範囲は、本稿の調査範囲と同範囲である。

注 10) 花街建築とは、料理屋・待合・置屋の三業と花街に関連する用途の建築物の総称である。詳細は本稿 4 章で説明する。後述する「茶屋」は待合と同様、建物内に板場を持たないものをいう。しかし、花柳界の用語は使用される場所や時代、使用する立場によっても変化するため、一義的なものではない。例として、浅原須美の「東京六花街 (2007 年発行)」より、江戸時代末期の新橋では、現在は「料理屋」と呼ばれるものが「茶屋」と呼ばれていたことが分かる記述を読むことができる。

注 11) かつて新潟には堀があり、堀端には柳が並んでいたため、その風景を称して「柳都」と呼ばれた。現在もその名称は柳都大橋、芸妓の通称「柳都さん」等、広く親しまれている。

注 12) 新潟三業協同組合に非加盟の料理屋にも芸妓は呼べるが、料金は高い。

注 13) 範囲外の「小三本館」と範囲内の「小三別館」は三業組合には一つの料理屋として登録されているため、料理屋の営業数では 2 店舗で 1 軒とする。

注 14) 昭和 62 年に新潟市の地元有力企業約 80 社の出資で設立した、全国初と言われる株式会社組織の芸妓養成及び派遣会社。所属する芸妓は「柳都さん」と呼ばれる。

注 15) 新潟はかつて「舟江」とも呼ばれており、昭和 10 年には「舟江をどり」という古町芸妓の舞踊公演が行われたが、二回目以降は開催されていない。

注 16) 「新潟市民文化遺産制度」とは、地域の文化的遺産の認知度向上を目的に、継承活動を支援する制度であり、平成 27 年度までに 218 件認定されている。

注 17) 本稿では独立した一人の芸妓の住居で、本人以外の芸妓を抱えていない場合でも、置屋組合に加入し、屋号が登録されていれば置屋とする。

注 18) 金子楽器店は和楽器店だが、古町芸妓が買いに行く店ではなかったことが古町芸妓へのヒアリングにより分かったため、花街関連建築から除外した。

注 19) 新潟三業協同組合に加入していない飲食店は、一般飲食店とする。

注 20) 雑居ビルは、キャバクラやスナック等の店舗が 2 軒以上混ざっているものが多く、特に花街の景観と対立する恐れがあるため、他の用途と区別する。

注 21) 図 1 ではホテル名ではなく、ホテル内の料理屋名を記す。「割烹 万代」はホテルの建物内に、「割烹 蛍」はホテル所有の隣接した建物に同居している。

注 22) 現地調査は 2013 年 6 月～2015 年 9 月で計 19 回、ヒアリング調査は同期間に芸妓 3 名、新潟三業協同組合、新潟芸妓置屋組合、料亭 6 軒へ計 17 回行った。

注 23) 新潟三業協同組合、芸妓置屋組合の事務所、検番、若手芸妓「柳都さん」の化粧室と着付け部屋、舞や三味線等の稽古部屋、舞踊を披露するホール等の花柳界機能が集約した三業会館建築。昭和 39 年建築のモダニズム建築。

注 24) 建築物の主要な入口が面する街路を基準とする。建築物が 2 種以上の街路に面している場合、現存するものでは現地にて主要な入口位置を確認し、現存しないものはヒアリングにより確認する。以上の方法で判別が困難な場合は、新道を第一、路地を第二、通りを第三、小路を第四の順で優先的に判断する。

注 25) 「新潟繁昌記」(明治 41 年発行) に、花街に関わる建築物は通りや小路等の表通りでなく、新道に入口を設けるような約束事があったと記載がある。現状でも、通りと新道に建築物が面する鍋茶屋・有明は新道側に玄関があり、通りと路地に面する金辰は路地に玄関があるため、反例は存在しない。よって、概ね信頼できる情報だと考えられる。

注 26) 一棟の建築物が置屋と邦楽の師匠宅兼稽古場を兼ねている場合、三業である置屋を優先的に抽出するため、建築物の棟数は置屋として算出し、邦楽師匠宅兼稽古場については軒数のみ括弧内に示すこととする。

注 27) 例として「新歌本」は「歌本」、「分桂家」は「桂家」の分家である。

注 28) 風営法では、料理屋と待合の営業にも風俗営業の許可が必要となっているが、本研究では三業を別枠で分類する。

注 29) 昭和 5 年頃の古町花街地図や資料には、歩道に関する記載がないため歩

道の有無は不明である。堀や街路の形状等については昭和 5 年の古町花街地図に従って作成したが、その正確性は不明なため、今後詳細な検証が必要である。

注 30) 「東雲」は料理屋と待合を兼業しているが、料理屋は業態として待合を包括するものといえるため、建築物の棟数は料理屋として算出し、待合は軒数のみ括弧内に示すこととする。「梅本」は料理屋と置屋を兼業しているが、置屋は料理屋経営者である芸妓の住居であるため料理屋に付随するものと考え、建築物の棟数は料理屋として算出し、置屋は軒数のみ括弧内に示すこととする。

注 31) 「ねざめ湯」や「乙湯」等の地区内の銭湯では、古町芸妓しか利用できない時間帯があったということが古町芸妓へのヒアリングで分かった。

注 32) 堀や街路の形状等については「昭和 35 年新潟市家屋明細図」に従って作成したが、その正確性は不明なため、今後詳細な検証が必要である。

注 33) 坂内小路は平成 18 年にボンネルフ化されたが、街路の詳細な形状を明らかにすることは本研究の目的上必要性が低いため、地図では簡略化する。

注 34) 「光琳」は「鍋茶屋」が、「かき忠」は「かき正」が営業しているが、メニューが異なり、料金は安く設定されている。また、原則芸妓は呼べない。本研究は建築物を対象とするため、店舗が別棟であれば別の料理屋として数える。

注 35) 「寿々むら」は待合の組合でなく料理屋の組合に加入しているが、建物内に板場を持たないため本研究では建築的に分類して待合とする。

注 36) 2 軒ある待合の内の 1 軒「美や古」は、現在休業中である。

注 37) 料理屋「鍋茶屋」「小三別館」及び待合「寿々むら」等は、それぞれ建築物の増築等により複数の建築物で構成されているため構造上は 1 棟ではないが、本研究では外見上繋がっているため「1 棟」とみなす。

注 38) 昭和 7 年の新潟三業組合員名簿(行形和也氏所蔵)より、料理屋業の組合として「新潟市料理店業同盟会」に 14 軒(現在、三業組合に加盟していない本町通 11 番町にある国登録有形文化財の老舗料理屋「大橋屋」を含む)、「睦会」に 16 軒、「中料理組合」に 30 軒、料理屋業に類する組合として「新潟市西洋料理組合」に 31 軒、「新潟市麺類業組合」に 12 軒、5 組織で計 103 軒の加盟店が確認できた。その内、昭和 5 年頃の古町花街地図と照合し、本調査範囲内に確認できたものは 24 軒だった。また「新潟市待合茶屋組合」に 38 軒、「新潟古町芸妓組合」に 170 軒、「下芸妓・貸座敷組合」に 45 軒加盟していた。以上、8 組織で新潟三業組合は構成され、現在と異なり幅広い業種で花街は成り立っていた。

注 39) 関西に多い茶屋中心の花街は二業地(茶屋・置屋)、全国に存在する料理屋中心の花街は三業地(料理屋・待合・置屋)と呼ばれる。詳細は参考文献 1) を参照。

参考文献

- 1) 加藤政洋：花街 異空間の都市史，朝日新聞社，2005.10.25
- 2) 岡崎篤行，今村洋一：湊町新潟の再生，都市計画 61(2)，pp.38-39，2012.4.25
- 3) Atsuyuki Okazaki, Noriko Hokari, Yoichi Imamura: “Kagai” Traditional Entertainment Districts : Their Present Condition and Conservation, Journal of International City Planning, pp. 373-381, 2012. 8
- 4) 岡崎篤行，今村洋一，佐藤正宗：新潟・古町花街における伝統的景観の継承，日本建築学会大会(関東)研究協議会資料 共創時代の都市デザイン像 景観の計画のリビジョン，pp.57-60，2011. 8
- 5) 藤村誠：新潟の花街 古町芸妓物語，新潟日報事業社，2011.7.25
- 6) 松井大輔，窪田亜矢：神楽坂花街における町並み景観の変容と計画的課題，日本建築学会計画系論文集第 77 巻第 680 号，pp.2407-2414，2012. 10
- 7) 久保有朋，岡崎篤行：花街建築に関する分布の変遷及びまちづくりのプロセスー八王子市中町を対象として，日本建築学会大会学術講演梗概集都市計画，pp. 475-476，2014. 9
- 8) 井上年和，井上えり子：京都上七軒花街の変遷，日本建築学会大会学術講演梗概集 建築歴史・意匠，pp. 415-416，2013. 8
- 9) 佐藤智文，岡崎篤行，松井大輔：北海道・東北地方の花街における建築用途の変遷ー山形市七日町・酒田市今町を中心としてー，日本建築学会技術報告集 第 21 巻 第 49 号，pp.1223-1228，2015. 10
- 10) 高橋康夫，吉田伸之，宮本雅明，伊藤毅：図集 日本都市史，東京大学出版会，1993. 9. 10
- 11) 小松田里美，岡崎篤行，今村洋一，佐藤正宗：新潟市古町地区周辺における路地の分布及び成立状況：堅屋町屋の市街地に着目して，日本建築学会北陸支部研究報告集 (54)，pp. 413-416，2011. 7. 10
- 12) 新潟市史編さん近代史部会：新潟市史，新潟市，1990.12.25
- 13) 中俣正義：思い出ほろろん 新潟編，新潟日報事業社，p. 36，1997. 8
- 14) 石塚英一，桜井進一(写)：わが青春の街角，新潟日報事業社，p.27，1990.9.11

TRANSITION OF DISTRIBUTION ON BUILDINGS IN “KAGAI”

– A case of Furu-machi in Niigata City from early Showa period to the present –

Aritomo KUBO *, *Atsuyuki OKAZAKI* ** and *Daisuke MATSUI* ***

* Grad. Stud., Dept. of Science and Technology Niigata University

** Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata University, Dr.Eng.

*** Assist. Prof., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Niigata University, Dr.Eng.

1. Background and Purpose

Kagai collectively inherit many aspect of traditional Japanese culture, from architecture to music and cuisine both tangible and intangible. In the past, Kagai were ubiquitous throughout Japan. Today, the number of active Kagai is about 40. Furu-machi Kagai is a significant area, because the historic townscape, which is different from those in Kyoto or Kanazawa, is remained. Most traditional Kagai in comparatively large cities were lost by air raids in the Second World War. This study aims to clarify transition of distribution on buildings in Kagai at the period of 1930, 1958, 1972 and 2013.

2. Overview and Methodology

The gross area of Niigata is approximately 726 km² and its population in 2015 is approximately 800,000. Niigata was originally established as a port-town and rebuilt on the present site in 1655. Furu-machi is located in the center of Niigata. In this study, field works, searching for old maps, interviews with experienced Geisha etc. were conducted.

3. Transition of distribution on buildings in Furu-machi Kagai

In 1930, Furu-machi was comprised of 17 Ryoriya, 27 Machiai, 98 Okiya.

In 1958, there were 27 Ryoriya, 21 Machiai, 52 Okiya.

In 1972, there were 27 Ryoriya, 18 Machiai, 48 Okiya.

In 2013, there were 12 Ryoriya, 2 Machiai, 2 Okiya.

Kagai buildings concentrate along the East and West Shin-michi street during the whole period.

4. Conclusions

- 1) Kagai buildings concentrate along the East and West Shin-michi street during the whole period.
- 2) The number of Ryoriya is larger than Machiai from 1958 to 2013. But there are more Machiai than Ryoriya in 1930.
- 3) The dense area of Okiya moved from the West Shin-michi to the East Shin-michi at the period between 1930 and 1958. Ryoriya was distributed on the entire area at the period between 1930 and 1958.
- 4) A large number of Machiai and Okiya were changed into to modern eating and drinking businesses.
- 5) East Shin-michi is regarded to be the most important area for townscape conservation and improvement.

(2015年10月10日原稿受理, 2016年5月2日採用決定)